

日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP) 関東

特集・あかし文章を書き続けて



文は信なり

2019年初冬号 40号特集

発行責任者
三浦喜代子 (代表)
事務局
〒131-0043
墨田区立花 4-6-13
TEL&FAX
03-3616-8621
郵便振替
00170-0-61838
HP: <http://jcp.daa/>

【目次】P1 駒田隆 P2 山角正子 志田雅美 P3 奈良ノリ子 島田裕子 P4 三浦喜代子
P5 三浦喜代子 篠田一志 西山純子 P6 榎尚子 山本披露武 P7 長谷川和子 駒田隆
P8 島本耀子 山本千晶 P9 安東奈穂美 三浦喜代子 P10 編集後記 P R JCP 紹介

「明治のキリスト教」(二) 駒田 隆

明治二七年八月、日清戦争の勃発を機に、ナショナリズムが高まって、外国の援助を断る教会も増えました。この頃、教会には、植村正久の「日本基督教会」を中心とする流れ、内村鑑三を中心とする「聖書中心主義」の無教会派、海老名弾正を中心とするキリスト教を国家精神の中心とする「国家的精神主義」の流れがありました。

日清戦争は、教会が反国家的、非愛国的でないことを試される時でした。多くの教会指導者は、この戦争を義戦であると称し、軍隊慰問に積極的に活躍する牧師もおり、内村鑑三もまた、義戦であると支持していました。

しかし、この戦争が終わる頃、社会主義が日本にも波及し、明治三十一年、社会主義の原理と日本への応用を考える最初の「社会主義研究会」が発足し、その主なメンバーは、幸徳秋水を除き、安部磯雄、河上清などすべてキリスト者でした。社会事業でも、留岡幸助の家庭学校、石井十次の岡山孤児院をはじめとする孤児救済事業、知的障害児の保護育成などが始まっています。足尾鉍毒事件でもキリスト者が指導者田中正造を積極的に応援し、彼もまた、その遺品の中にポロポロになった新約聖書があった、と言います。

この頃の資料によれば、明治一五年の受洗者は一一七九名で、キリスト者は五六三四名と数えら

れ、明治二七年には、受洗者二八五四名、キリスト者は三六四五名とあります。

明治二八年に来日した救世軍は労働者階級や社会事業に熱心に伝道し、日本人として初めて士官になった山室軍平もこの頃入隊しています。福音同盟会も、明治三十三年四月に「全国大挙伝道」を決議し、伝道を強化しましたが、どちらかといえば大都市中心であって、農村伝道は日の目を見ることがなかったようです。

明治三七年二月、日露戦争が起きました。教会の主だった指導者は主戦論を唱えており、非戦論を主張したのは、内村鑑三、柏木義円、木下尚江、白石喜之助ぐらいでした。セブンスター・アドベントの伝道者矢部喜好は、召集を受けた時に、「殺すなかれ」という掟に反することは出来ない、と言って召集を拒否して処罰を受け、結局は傷病兵の看護業務にあたり、日本最初の良心的兵役拒否者となりました。

明治四三年八月の韓国の日本への併合を経て、日本政府は、教派神道、仏教、キリスト教(カトリックも含む)の代表を呼んで、天皇制的国民教化政策への協力を求め、各教派はそれを承認しました。多くの青年を引きつけた明治のキリスト教は、こうして、天皇を頂点とする国家主義に飲みこまれていったのです。



あかし文章に向かつて

山角正子

今年の五月二十五日に、やっと日本クリスチャン・ペンクラブの一員に加えていただいた。

六年以上も前から、同じ新津田沼教会に集う西山純子さんにペンクラブの本を頂戴したり、例会に数回出席させていただいていたのに、なかなか入会を決めることができないまま時間は過ぎていった。

そして二年前。ペンクラブが自分史「百花繚乱」出版に着手されると純子さんに伺った。「何と魅力的な企画だろう」と心惹かれた。同じ教会員の奈良ノリ子さんも執筆されることを知り、私もその仲間に入れていただきたいと思った。まだ入会する決意が固まっていなかったため、例会に一回出席しただけで会員の方々とその文章の交わりも深めず、独断で書き上げたものを活字にしていたのだ。

結果、いざ本が出版されても、悔やむところ多く晴れ晴れした気持ちになれなかった。私の文章は自己アピールだけのものに思え、配布先は最小限にとどめた。娘たち夫婦、従妹、信仰を同じくする友人たち、そして教え子の中で教職についている二人にお届けした。

それぞれに感想を寄せてくださった。が、二人の教え子からは音沙汰がない。「親族や、信仰を同じくする友以外には、あの本は受け入れられない

のだろうか」、「教え子たちは、信仰を押しつけられたと思っただろうか」、「新興宗教的なキリスト教と混同されただろうか」と、悩んだ。

十日後、彼女たちからそれぞれに手紙が舞い込んだ。『先生の人間性の土台にキリスト教があったことを知り、得心がいった。あの頃自分たちは、先生を喜ばすために、勉強も、行事も頑張った。神様が私たちを出会わせてくださったと思う。『百花繚乱』を母親に見せてよいですか？』

『小さいころ、教会の英語教室に行っていたので、キリスト教に親しみを感じている』という内容だった。

その後、生徒のお母さんからも手紙をいただいた。『若い時、教会に通っていた。その頃の純粋な気持ちを取り戻した。友人にも、本を見せてよいですか？』と記されていた。

文章の影響力の大きさと重要性に気づかされた出来事だった。神様に生かされている喜びを伝える希望の光に包まれる思いだった。

ペンクラブの一員として生きたいという思いがふつふつとわいてきた。

みなさま、よろしくお願いします。



一通のメールから

志田雅美

証し文章を書き始めたのはおよそ一〇年前のことだ。きっかけは同じ教会に通う信仰の先輩でありペンクラブの先輩でもあるY兄に送った一通のメールだった。

その頃の私は次から次へと襲ってくる試みに身も心も疲れ果てていた。しあわせになりたくてクリスチャンになったのに、しあわせとは程遠い毎日だった。メールにはそういうことを訥々と書いた。

すぐ、Y兄が返事をくださった。悩みごとへの答えでも信仰生活へのアドバイスでもなく、証し文章を書いてみないか、という内容だった。『百万人の福音』のペンライト賞に応募してみないか、というのだ。私は喜んでその提案を受け入れた。

私は子どもの頃から作文が好きで、言葉よりも文章の方が自分の思いを素直に表現できた。

それから、書いては直し、直しては書きをくり返し、半年かけてようやく作品が完成した。それが佳作に入選した。間もなくペンクラブに入会した。以来、私にとって書くことは神さまを証しするという意味でも自己表現をするという意味でも、必要不可欠なものとなっている。

これからも書き続ける。天のみくに旅立つその日まで、書き続けようと思う。きっかけをくださったY兄と、志しを与えてくださった神さまに感謝している。

何をしてほしいのか

奈良ノリ子

私の教会の友人である西山純子姉は、長い間JCPの会員でいらつしやいます。

彼女は証し文書ができると私の週報ボックスにそっと入れてくださいます。

『百花繚乱』の編集計画の時も、声をかけてくださいましたので、誘われるままに時々例会に参加するようになりました。

それをきっかけに、貧しい文章ながら書くことを通して、人々にキリストを証しする群れの一人となり、今、喜びを感じ始めております。

例会で、グループに分かれて、お互いの作品を読み合い、感想を述べ合う時、自分一人では発見できなかった問題を発見して「ああ、そうなんだ」と納得します。

ルカによる福音書の一章に、一人の盲人がイエスにお会いしたいと待っていると、イエスが盲人を連れてくるように命じ、盲人に「何をしてほしいのか」と問われます。盲人は「主よ、見えるようになりたいのです」と答えます。イエスは「見えるようになれば」と言われ盲人の目を開かれた記事があります。

文章を通して、読む人々が自分の弱さを知り、限りなく注がれる主の御愛を信ずる者とされるように、主の証し人として歩む者になりたいです。

ただ神の栄光を

島田裕子

小学生のころ作文が苦手だった。何を書くか考えるだけで作文の時間が終わっていた。本はあまり読まなかった。中学生になって、先生から文章を認められ、日記でもいいから毎日書くように勧められた。

私には空想癖があり、中二のころは一日の大半を空想の世界で過ごしていた。現実があまりにも辛かったからである。頭の中で生き生きと脈打っている物語を書いてみることにした。書き始めると自分でも驚くほどなめらかに筆が進み、「私って天才！」と自画自賛。作家になろうと思いついて、それから小説を書くようになった。

ところが幼稚園に就職したら書けなくなった。結婚して子どもが与えられたら、もっと書けなくなった。何のために書くのかわからなかった。

夏休み最後の週、中学生の自殺のニュースが相次いだ。私は衝撃を受けた。自分が中学生のとき、存在価値がわからなくて毎日死にたいと思っていたのだ。かつての私のように絶望している子どもたちに神様の愛を伝えたいと願い、童話を書いて投稿を始めた。数えきれないほど投稿したが、落選ばかりだった。キリスト新聞社の「クリスマス童話」には毎年投稿した。九回落選して十回目に挑戦しようとしたら、童話募集がなくなつた。がっかりしていると、打ちのめされるようなことが

起きた。フロppyディスクに保存していた作品すべてが失われたのだ。バックアップはとつていなかった。

今までやってきたことは何だったのだろうか。茫然として、書く気力まで失われたとき、聖書の言葉が迫ってきた。

「あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っていますから。『コリント十五・58』」

これまでむだなことをしてきたのではない。デュータが消えたのも、何か意味があるのに違いない。書くことを神様に捧げようと思った。

そのころ、クリスチャン新聞社で小説を募集していた。私は、空っぽの掌を掲げて祈った。

「神様、いままで入選すること、書き続けることにこだわり続けてきましたが、いま、『書くこと』をあなたにお捧げします。『書くこと』があなたのみ心になつてないのなら、書けなくしてください。でも、書くことがみ心なら、神様の栄光をあらわす小説を書かせてください」

神様は入選させ、本にしてくださいました。それから十七年。今、私は神様から力をいただいて、日本クリスチャン・ペンクラブで書き続けている。

これからも、ただ神様の栄光をあらわすために書いていきたい。バッハのサイン、SDC（ただ神の栄光のために）のように。

あかし文章のきっかけ 三浦喜代子

我が教会の初代F牧師は、文書伝道に大きな期待と重荷を持っておられた。そこに若き日の私が導かれていたのは、今思い返すと、幸いなことであり、恵みであり、感謝の一言しかない。

教会は牧師の説教を毎週500通も地方の小さな教会や群れに送っていた。教会員はガリ版印刷から投函まで、夜の更けるまで奉仕した。私はこの作業がたまらなく好きだった。

ある時から、牧師の発案で、クリスマスとイースターに「文集」を発行することになり、原稿募集が始まった。私の心は大きくときめいた。

以後文集は10年間継続した。私は一度も欠かさず投稿し掲載された。たとえガリ版刷りでも、自分の文章が一冊の中に収められ、私の知らない人たちにも読まれているのだ。私は幸福感でいっぱいになり、発行が待ち遠しくならなかった。

何を書いてきたかと言えば「あかし文章」そのものであった。最初の記事は忘れられない。

その時私は入院中であつた。クリスマスに第一号を発行すると報告があつた矢先、8月の末であつたが、私は思わぬ交通事故に遭つた。大きな事故で、もし傷が炎症を起こしたら、左足を切断すると診断された。ところが医師団も驚く神の奇跡によって最悪の事態は免れた。しかし身動きできない病床に三か月半釘付けにされた。そのさなか

に、牧師は闘病記を書けといわれる。折しも私は、実体験した神の愛と恵みを書かずにはいられない強い思いに迫られていた。

『病室にて』と題し、*〇〇病院整形外科病棟308号室から*と添えて寄稿した。

その文集類だけは昨今の断捨離の斧も振るえず、厳選した保存箱の底に収めてある。近年、先輩のT兄が「あの文集こそ、あなたの文章活動の原点だよ」と言われたが、そのころからすでに主の恵みの備えがあつたのだと思う。

歳月が過ぎてF師が召され、教会も変わつていった。変わらなかつたのは、私の内に主がともしてくださったと信じる、書きたい炎だった。しかし発表のチャンスもなくあえて探すこともしなかつたが、主は覚えておられたようだ。

仕事の合間に某伝道団体に係わつて時々奉仕していたが、あるとき責任者から「機関誌に何か書いてみませんか」と声がかかった。

私は爽涼な水しぶきを浴びたように身震いして大きく目を見開いた。喜びが沸き上がった。初めて聖書エッセーを書いた。クリスマス号だった。

飼葉おけにすやすやと眠る赤子のイエス様と嵐の湖の小舟でぐつぐつと眠るイエス様のお姿に、試練の体験を織り込んで証し的一篇とした。以後聖書の場面を切り取ってはあかし文章を書いていった。私に適した作風に思えて意欲が増した。

JCPに入会したとき満江師が「あんたはこういうものを書いていきなさい」と半ば命じられた。まさに鶴の一声、私は勇んで師の助言に従つた。

一枚の原稿用紙修行のおかげで次第に50枚、100枚が書けるようになり、やがて聖書の女性を取り上げた一冊『系図に咲いた愛』が誕生した。

それからは多産な女性のように「本」という我が子を産み続けた。もちろん出産力は主の恵みによるのだけれど。

ふと思い出して『文は信なり36号65周年特集号』を開いた。そこに「人生の習慣・私と書くこと」として、3000字の証しを書いていた。懐かしく読んだ。教会の文集以前の、私の作文の原点が記されていた。

幼い時から書くことに興味と喜びと情熱を抱いていたことを知る時、これこそ神様の備えられた賜物だとわかった。賜物とは神の栄光のために用いる能力のことだ。神様は、私に、作文を通してご自分を証しさせようとしておられるのだ。あかし文章は神様から託された使命なのだ。だから、私はこの使命に立つ。

尻込みしたくなる時もある。旗印が霞むときもある。投げ出したくなる時もある。疲労困憊し、息切れするときもある。PCに背を向けてうなだれる時もある。

しばらくすると、主の笑顔が見えてくる。肩に御手が置かれている。心が温かくなってくる。

近年、聖書以後のキリスト者女性たちに目が留まり心が動いている。今は、明治維新前後の女性たちを調べ、文字刻みを試みている。維新の英雄たちの陰で、血の吹雪を浴びながらも、信仰に導かれ、信仰の生涯を貫いた女性たちがいる。津田梅子や矢島楯子のような女傑もいるが、知る人ぞ知るのみの調べようもない多くの女性たちがいる。こうした女性たちを発見したとき、胸が高鳴り感動にあふれる。聖書の女性たちと出会った時と同じ親愛の情が生まれ「書きたい炎」が燃えてくる。「あかし文章」の応用篇とでも名づけようか。

『会津若松の火災・日本初の小公子の翻訳者を追って』の冊子のために若松賤子の資料に当たっていた時、忘れられない一文に出会った。賤子は晩年、某誌に自分が出会った有名無名の女性たちを簡略ではあるが紹介していた。

死期が迫っているところだった。賤子は語るのだ。「その人たちの顔が我が脳裏に何と押し合いへし合いひしめくことでしょう。ご覧の通り、私はヘボ作家ではありませんが、不器用に書いてきました」明治29年31歳で召されるとき「お墓には、【賤子】とだけ彫ってください。人には、一生キリストの恵みを感じただけ言ってください」と遺言した。私は駒込の染井霊園に行つて墓石の前にたたずみ、賤子の生涯を偲んだ。

あかし文章のきつかけはいくらでもある。

想定外のあかし文章を

篠田一志

「想定外」とは八年前の東日本大震災のとき、津波で被害を受けた福島第一原発に関連して頻繁に使われていた言葉だ。

それを聞いたたびに人間の無力さを感じ、「もし必要な備えがあったならば」と口惜（くちお）しく思つたことを今も鮮明に覚えている。

わたしたちクリスチャンにも忘れてはいけない【備えの働き】がある。

この世が終わりを迎えると、イエスさまが再びわたしたちのもとに来て下さり、すべての人々を一人一人吟味して天国に行ける人と行けない人をお裁きになると聖書は約束している。

そのとき、天国に行けなくなつてしまった人が「想定外」だと言つて悔やまないためには備えが必要だと思う。

その備えこそ、すべての人に聖書の約束を伝える伝道の働きだと信じて疑わない。クリスチャンに与えられた貴い使命ではないか。わたしは強い願いをもつてあかし文章に取り組んでいる。

イエスさまはひとりでも多くの人が天国に行けることを願つておられる。ところがサタンは逆のことを目論（もくろ）んでいる。

サタンが「想定外」と言つて地団駄を踏むようなあかし文章を書いてみたいのである。

『目標を目指して一心に走っているのです』

泣きながら

西山純子

ウオーン ウワーン ウオーン
いぬの チビが ないている
くらくて さびしい よる

これは小学校二年生の頃、私の書いた詩らしい。書き出しだけ今も記憶している。そこだけが評価されたのか、当時の何かに掲載された。多分、私は言葉を並べただけなのかもしれない。が、詩らしき形の何かに惹かれたようだ。「書くことの好き」な少女に育つた。

好きなだけで育つた、大人になつてもそのままで書きたいから書いた。褒められたから、書いた。勧められたから書いた。嬉しかったから書いた。悲しかったから書いた。

ある日エバンジェリストの方から「神様が貴女を必要とされている。日本クリスチャン・ペンクラブの夏期学校に行きなさい」との熱心な勧めをいただいた。「いつか、きつと行こう」と、私は強く思つた。時が来て熱海の夏期学校に出席した。そこで、コリント第二・三章三節の言葉に出会い、この使命を確信した。

『あなたがたは、キリストがわたしたちを用いて、お書きになつた手紙として公にされています』
今の私は心身弱く乏しい中にある。時には泣きながら文章を編む。泣きながら、あの時いただいた使命を果たさせてくださいと祈りつつ書いています。



あかしを書く

榎 尚子

キリスト新聞では時々読者からの原稿を募集している。中でも秋になると「クリスマス童話」を募集していた。

ある年に応募したところ、偶然にも掲載していただいた。そのようなとき満江先生から「ペンクラブに来ませんか」と声をかけていただいた。それまで自分であかしの文章を書くなどと、思ってもみなかった。あかしとは語り聞くものではないか。

誘われて行ってみた会では皆さん熱心で、私は遠い世界に思われた。月に一回の例会では満江先生の礼拝の後、毎回外部講師による専門的な講座が用意されていた。何をどう書くかについては具体的な指導は一切行われていなかった。夏の熱海での夏期学校が唯一の文章教室の場だった。

全くわからない私は先生方や先輩たちの話を聞いてそのまま帰るということを数年間繰り返していた。

ある年、自分が書き溜めていた作品を自費出版した方がいた。それを何人かに配っておられたようで、その日の講師もすでに読んでおられた。「いい作品集ですね。あなたはどこで文章修行をされましたか」

彼女は満江先生の名前とともに「先生はここにいる皆様です」と答えた。それ迄日本クリスチャ

ン・ペンクラブは話を聞く会だと思っていた私は、ここは書くことで証しをする会だということをはつきりと知ることとなった。

実際にペンを取って書くことは夏の四百字原稿一枚だった。そのために何日もの準備の時、学びがあったのだった。

書くことの下敷きになる人生経験や信仰生活や教会生活、幅広い読書、直接には関係ないと思われる教養講座も「書く」ことへの備えであると思われた。心の中にあるなにかはそのままで思いでしかないが、言葉にすることによって広く分かち合うものであると教えられた。

神様は実に多様な人間をお創りになった。そして神様を知る方法も多様だった。人は言葉を生み出し、しかもそれぞれの言語を生み出し、話すことと書くこと（文字）を生み出していった。

言語を通して、絵画を通して、音楽を通して、人は人生を生きてきた。あかし文章を志す私たちに目に見える形として日本クリスチャン・ペンクラブを与えてくださった神様に心から感謝したい。しかしながら書くことは大変だ。思いがあれば書けるわけではない。一人で努力しても長続きしない。課題作品を書き溜めていくうちにようやく作品になったり、仲間の作品から力やヒントをいただいたり、そんな長い日々であった。いつの日かどこかの誰かに届くことを祈って書いていきたい。

証し文学賞に挑戦して

山本披露武

定年退職をする少し前になって、「証し」を書いてみたいと思うようになった。しかも、折角書くのだから、活字にしてもらえるものと欲を出し、クリスチャン新聞の「証し文学賞」に、応募することにした。

もちろんすばらしい作品を書きあげることができた。

「うん、これなら入選は確実！」

そう思っただけで投函した。

しばらくして、クリスチャン新聞に一次選考の結果が発表された。

「無い！ 私の名前が無い」

どうして？

そう思っただけで、落とされた自分の作品を読み直してみた。

不思議なんだよね。それまでは、何回見直しをしても、悪いところなど何処にもない、最高の出来だ。そう思っていた作品が、落選してから読み直してみると、悪いところだらけ。これでは落選するのが当たり前だと思ふようになってきた。

よし、もう一度挑戦してみよう。

そう思っただけで頑張り、ようやく佳作ではあったが入選。もしその時も落選していたら証しを書くのはやめていたかも。



伝道のためです

長谷川和子

クリスチャン・ペンクラブに入会したのは、今から四十数年前になる。きっかけは、キリスト新聞に私の文章が載ったのを、前々理事長の満江巖師がご覧になり入会を勧められたからである。

満江先生の厳しい指導は文章だけでなく、会員個々の言行にも及び、時には激高することも。

先生の言葉に脱会する者もいた。なぜ私が居続けることができたのか、それは師の説教が簡潔明快であり、特に四〇〇字の文章作法に魅せられたからである。それは長々と説明の多い我が文章にとって、良き学びの場となった。

原稿用紙一枚の中に様々な文字を紡ぎ、内容や背景が読者に理解できるように、どの言葉にしたらいいか、まるでジグソーパズルのピースを詰め込むように、文章の組み立てに苦悩した。

「なぜ書くのか」と問われたなら「伝道のためです」と速やかに答える。振り返れば、キリスト教に導かれたのも、ルーテル通信講座の文字によってであり、常に目にしていく聖書の文章によって、神のみことばの世界へと導かれている。

まだまだ未熟であるが「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても、励みなさい」テモテ書四・二の言葉に従うだけである。

十字架を仰ぎつつ、これからもあかし文章伝道に励みたいと思っている。

文は信なり

駒田 隆

「文は信なり」。

最初にこの言葉を聞いた時には、少なからずとまどいました。公務員だったわたしは、文章を書く機会は多かったです。それまでに、こんな言葉は聞いたことはありませんでした。何を訴えたいのだろうか、何を語りたのだろうか、と感じました。

しかし、自分の信仰を語るようになった時に、自分の拙い文章を読んでくれ人から、わたしの信仰について感想を聞かしてもらい、わたしの書いた文章が、その人の心に訴える何かがあったことを知りました。

それは、わたしのささやかな文章が、その人の心の扉へのノックになっていたのです。その人は、心の扉を開いて、キリストを知りました。いえ、キリストの愛を知ったのです。わたしのささやかな文章で、キリストの愛の一端にその人の手が触れたのです。

ローマ教皇フランシスコは、ある人との対話の中で、「わたしたちの模範であるイエス・キリストにならって、橋を架けねばなりません。」と語り、また、アフリカの宣教師たちが、現地で身を粉にして働いているのは、人々を「改宗させるためではありません。改宗などと言っていたのは昔のこと、今は奉仕するためにそこにいるのです。」と

語りました。ここには、キリスト教を、上からの目線で押し付けることはありません。むしろ、へりくだった、未知の人と同じ視線に立った人がいるのです。

「文は信なり」と、わたしたちが、あかし文を書いているのは、まだキリスト教を知らない人に、キリスト教を勧めるのではなく、また、キリスト信徒になお一層の高い信仰を勧めるのでもなく、自分の受けたイエス・キリストの愛のすばらしさを、共有するためなのではないでしょうか。

信仰によって得られる安らぎを、ともに分かちあうためなのではないでしょうか。自分を誇ることはなく、自分の得た幸せを、相手の人にも受けてもらいたいことではないでしょうか。

「山のあなたの幸い」を麓で求めているのではなく、そこへ行く道に共に橋を架けて、共に手を取りあつて行く時に、信仰のあかし文が力強いステッキになっていくのではないかとわたしは思っています。

わたしのさ
かし文が、あ
扉へのノック
こんな幸いな
ません。

さやかなあ
なたの心の
になれば、
ことはあり



近況・難病は新しい個性 島本耀子

私の両親は明治生まれですが、跡取りではなかった。守るべき位牌などはなく、お寺とは無縁でした。それでも父の友人の一人がクリスチャンで、その人は、当時子供だった私たちにも優しい人でした。彼の影響か、父は偶像を否定してました。晩年にも、キリスト教の人が度々来て話し込んでいたと母が言いました。遺品中には異端派の本があり、父は真実の神様を求めていたのです。私は宗教とは無縁の家庭で育ったのだと思っていました。父の八人きょうだいのうち、二人はクリスチャンでした。私の六人きょうだいの中では姉と私の二人だけです。

姉は素直にイエス様を信じましたが私は既成の宗教には従わないと、頑固に言い張っていました。私は大きな事故に遭ったあと、「目に見えない、大きなもの」に助けられたと思いましたが、その大きな存在とは何か、誰に感謝すべきなのかその正体を自分で探し当てたかったです。父がいつも、苦しい時の神頼みだけではダメだと言っていたことも強く影響していました。

再び、思いがけない試練に出合った時、クリスト教以外に神様はいないのだと、やっと気が付き、間もなく夫と二人で近くの教会へ通い始めました。

神様はずっと、私の心の扉を叩き続けて下さっていたのだとわかると、聖餐式のパンと葡萄酒が、私たちの前を素通りするのに物足りなくなりました。一年半後に受洗しました。

私の受洗は、只々神様に感謝を捧げるためでした。受洗した後は、聖書を読むたびに胸が高鳴りました。天国での永遠の命など、私には相応しくない、と思っていたのに、みことばは親しく近づいてきます。

私は間もなく八十三歳になります。

思いがけない難病ですが、パーキンソン病と診断されてから五年目に入りました。パーキンソン病は、神経伝達物質のドーパミンが不足して動作が緩慢になり、全身に様々な症状も出て、それは百人百様です。命は取りませんが、ゆっくりと進行して、患者を悩ませる厄介なものです。根本から直す薬は、未来の段階ですから、今ある薬を病気の進み方に合わせて飲み方を考え、最後まで自分の足で歩くためのリハビリに励んでいます。

趣味やボランティアなど、少しずつやってきたことは止めて、今は証し文章だけです。すべては神様のご計画でしょう。私は新しい個性を頂いたと開き直り、ゆっくりと生きることになりました。

★島本姉は長く本誌の編集に携わり、稀なる力量を發揮して支えてくださいました。感謝！

近況・再会から生まれた思い 山本千晶

「お久しぶりです。覚えていらつしやいますか」。電話口から懐かしい声。

「もちろん。Mさんですね。お元気？」
数年ぶりの連絡だった。以前、ゴスペルに通っていた方である。耳に届く声は変わらず少し控えめで柔らかい。

仲間と新しくゴスペルを歌いたかったので手伝ってほしいとの依頼だった。

具体的に詳しく話をしなくてはと、数日後直接お会いした。お仲間のリーダーと名乗られる女性も一緒だった。

「実は私たちはAという団体のメンバーなんです」。驚いた。耳にしていた団体だが、世間では教会とは一線を画している新興宗教の団体だ。

私は躊躇することなく辞退することに決めたが、その夜はMさんの姿が脳裏から離れなかった。

翌日、教会の祈禱会の席上で、屈託なく信じているMさんの姿を想い、自分に出来ることが何かないかと、前日のことを話した。「祈ってもらった。」

その時、「ここで、この教会で、ゴスペルを始めたい」との思いが生まれた。

Mさんが歌いたかったゴスペルを、いつかこの教会で一緒に歌いたいと、熱い思いが込み上げてきた。



書けば広がる

安東奈穂美

ペンクラブに入会して、証エッセーに出会いました。

作品を読んでくださった方が、聖書に興味をもったり神様を感じたりしてくださることを願いつつ書いています。

自分史に取り組んだ時は、自分に対する取材ノートを作り、過去の出来事や感じていたことを書いてみました。

すると、自分から見た出来事が違う角度から見えました。の大怪我な不安だったとして生きて連続の結果自分が認



で多くの人に助けられてきたこと、そしてその背後には神様の働きがあったことに感謝の思いが溢れてきます。

例会のほかに、童話・エッセーの会にも参加し、子どもの頃からの空想癖が役にたっています。自分の思考パターンや感じ方の個性を知る機会でもあります。生みの苦しみはありますが、書けば書くほど新たな世界が広がります。

いつも守ってくださる神様に信頼して次の一歩を踏み出したいと思います。

クリスマスエッセー
歩くクリスマス考

三浦喜代子

主イエス様がそのご生涯で辿られた道を聖書からなぞってみる。

マリヤがみ使いガブリエルから受胎を告知されたのはナザレである。マリヤはそこで生まれ育ったに違いない。婚約者ヨセフも同じ土地の人だったろう。ナザレは都エルサレムから一〇〇キロあまり北方の片田舎であった。

身重のマリヤは、ユダの山里に住む親類の老女エリサベツが半年前に身ごもったと聞くと、せかされるように会いに行く。そこは都エルサレムからはさらに南で、日帰りできる道のりらしい。

マリヤはエリサベツと神殿の祭司ザカリヤ夫婦の家に三か月ほど滞在してナザレに帰っていくが、産み月のころには再び南下してヨセフの祖先の出生地ベツレヘムへ急ぐことになった。お役所の命令で住民登録をするためであった。なんとあわただしいことだろう。

そのベツレヘムで、マリヤはとうとう出産する。預言の通り、救い主イエス様の誕生、降誕である。粗末な家畜小屋の真上には、世にも美しい巨大な星が瞬いていたという。

きよしこの夜 星はひかり
救いの御子は まぶねの中に
ねむりたもう いとやすく



イエス様の安らかなねむりのすぐそばに、残虐非道な魔の手が伸びていた。マリヤ夫婦は宮もうでもそこそこにエジプトへ逃げるのである。領主ヘロデは自分の地位を脅かす王が生まれたと知って恐れおののき、ベツレヘム周辺の二歳以下の赤子を皆殺しにしたのだ。

危機一髪のところ助かったものの、生まれたばかりのイエス様は遠くエジプトへ避難しなければならなかった。その道は、かつてイスラエルの民が四〇年かけて逆上った荒野を通るのだ。

聖なる家族三人がかの地でどのように暮らしたのか聖書は物語っていないが、悪人が死ぬと、神様はイエス様たちをナザレへと呼び戻す。

そして約三〇年、イエス様は両親と弟妹に囲まれて、貧しかったろうが、静かな平凡な歳月を過ごす。イエス様は長男である。伝承は、ヨセフは早くに亡くなったと語る。イエス様は家長の役割を担ったのだろう。マリヤはどんなにイエス様を頼りにしたことか。しかしマリヤはイエス様が神の御子であることを忘れたことはなかったであろう。その使命のためにいつか別れなければならぬことを肝に銘じていただろう。

公生涯に入られたイエス様は「枕するところ」なく、各地を駆け巡って働かれた。

最後の地はエルサレム。最後の場所はゴルゴタの十字架の上。そこで息を引き取られた。

「この方こそ神の子であった」と証しさせて。

★編集に携わって★

■予定通り発行出来てこの上なく感謝しています。数えてみれば40号に当たり、いっそう気を引き締めました。お導きか、テーマも「あかし文章を書き続けて」になり、「書くこと」の原点記事がカラフルに寄せられ、記念の号らしく装えたと言っています。さらに色を添えて「近況」も入り、折からクリスマスに向かいますので、「降誕からの匂い袋も加えました。お楽しみいただけたら幸いです。

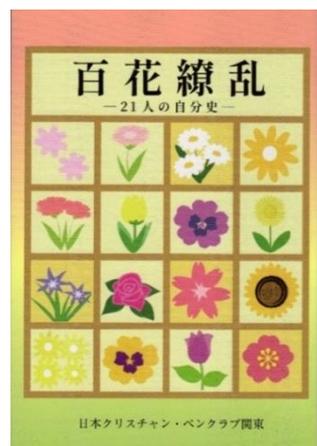
本誌が「キリストのすばらしさ」を伝える使命を果たすことを祈り願っています。(K・M)

■文は信なり・40号、無事に発行ができましたこと感謝しております。また編集の働きに携わることができましたことも感謝でした。

このたびのテーマは「あかし文章を書き続けて」です。あかし文章を書くことになった動機やJCP入会にまつわるエピソードなど「書く喜び」の原点作品が多く寄せられました。作品を通してキリストの愛を伝える者の変わりぬ喜びを多くの方々に知っていただければ幸いです。

本誌がキリスト伝道の働きの一翼を担えることを心から願っています。(K・S)

★JCPでは隔月で「例会」と「講話」(エッセーの会)を開いて学び合っています。関心のある方はぜひご来会ください。数回は低いはずです。お気軽にお出かけください。ご一報をお待ちします。



373頁・1800円

今年二〇一九年五月に、二年ぶりに証し作品集『百花繚乱』を出版しました。二〇一〇年からスタートした並列四字熟語をタイトルに冠したシリーズの第五巻目です。過去に『花鳥風月』、『喜怒哀楽』、『春夏秋冬』、『山川草木』の四冊が生み出されました。

『百花繚乱』には「21人の自分史」という副題がついています。執筆者たちは田ころから「あかし文章」に取り組んでいる同志です。あと少し残部がありますので、ご入用の方は事務局までご連絡ください。

★本誌「文は信なり」は関東ブロックが年一回ほど発行しています。HPにも掲載します。(誌代一〇〇円)。なおHPには例会他活動や会員の作品が多数掲載されています。御高覧いただけましたら幸いです。URLはトップページのヘッドにあります。

日本クリスチャン・ペンクラブ (JCP) の自己紹介

★起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

★現在は2つのブロックで活動しています。★関東ブロック(関東以北の地域)★関西ブロック(大阪周辺と西の地域)です。活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。この5月に関東が『百花繚乱 21人の自分史』を発行しました。(1800円+税)ご希望の方は事務局までご連絡ください。

★Web上にホームページを開いています。(URL <http://jcp.daa.jp/>)

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはHPのアドレスにご連絡ください。関東、関西は隔月に例会を開いています。案内はHPに掲載します。